

## 論文

## 幼児教育におけるエディブル・エデュケーション導入に関する基礎研究

小畑千晴（岡山県立大学保健福祉学部子ども学科）

山本孝司（岡山県立大学保健福祉学部子ども学科）

安久津太一（岡山県立大学保健福祉学部子ども学科）

エリック・デスマレス（岡山県立大学保健福祉学部子ども学科）

児玉太一（岡山県立大学保健福祉学部子ども学科）

**要旨：**本稿では、アメリカ発祥のエディブル・エデュケーションのカリキュラム類型、目的論、実践理論を、教育学、ソーシャルワーク、音楽の視点から描出した。その中で、エディブル・エデュケーションがコア・カリキュラムを源流とする子ども中心主義カリキュラムの派生形であること、子どもの主体的活動を旨とする教育実践であることを明らかにしたうえで、グリーン・ソーシャルワークの環境的正義の観点からエディブル・エデュケーションの目的論について論考し、さらに音楽教育の立場から食と音楽をつなぐ可能性について検討を加えた。この論考を通して、幼児教育におけるエディブル・エデュケーションの意義とその価値について明らかにした。

**キーワード：** エディブル・エデュケーション 食と植物 子ども中心主義  
グリーン・ソーシャルワーク 音楽教育

## 1. はじめに

子どもの食を巡る問題が多様化、深刻化している。1人だけで食べる「孤食」、家族で食事を摂っていたとしても別々のものを食べる「個食」、自分の好きなものしか食べない「固食」等、家族と共に作り、食べ、会話をする機会が減っている。こうした食の問題は、家族関係の在り方にも変化を与え、その影響は真っ先に子どもにおよぶために、子ども食堂が全国的に広がっている。

厚生労働省(2004)は、「食を通じた子どもの健全育成の在り方に関する検討会」報告書の中で、食を通じた子どもの健全育成の観点から、食行動の発達だけでなく、身体的・精神的・社会的発達を含め子どもを総

合的に捉えることの必要性と、目標と定める「楽しく食べる子ども」のためには、「人と身体健康」を保ち、「人との関わり」を通して社会的健康を培いながら、「食の文化と環境の関わり」の中で「食のスキル」を身に付けていくことだと示している。

更に、「食の文化と環境の関わり」は、食べものが自然の中で育成した生物を収穫し、流通、加工、調理されて食事として整えられること、すなわち、「自然・地域」「生物」「食べ物」「人間」、これらの広く深い関わりであることも示している。こうした一連のプロセスが食を通じた健全育成には重要であると記しているが、日本の学校教育において自然、生物、食べものそして人間に

まで言及し、分野を網羅した食育教育の実践は未だ多いとは言えない。

アメリカでは、小学校教育において種まきから育成、調理、食事までの一連の活動を教科教育と繋げる活動が行われている。カリフォルニアのバークレーで始まった食すことができる教育」を意味する「エディブル・エデュケーション」(以下 EE) (Alice Waters,2008) は、訳せば食育教育となるが、日本で行われているそれとは、扱う範囲、方法、食から各教科への学びへと転換することなどいくつかの違いがある。

こうした中、我々研究チームは、児童期の子どもたちへの EE の食を中心にした横断的教育手法の発想を参考にし、保育者を目指す大学生を対象に、学内の豊かな自然環境を中心にした分野横断的な学習プログラム開発をスタートさせた。大学における幼児教育人材育成とは、次の世代を担う大学生がさらに次世代の子どもたちの育成について考え学ぶ場である。すなわち、幼児教育人材育成においては、これまでの幼児教育における知見を学ぶだけでなく、子どもたちの将来のために、現代社会を見つめながら、未来社会を予測する視点も必要である。不確実性の高い未来社会で生き抜くために必要な柔軟な思考力と適応力は、自然科学と人文科学の文理融合による知識が必要であり、EE の横断的な知識獲得の教育手法は幼児教育人材育成において有効な手段であると考え。本稿では、まず EE のカリキュラムの特徴を明らかにすべく、国内外のカリキュラム史のなかに位置づけるための考察を行い、特にコア・カリキュラムを源流とする子ども中心主義カリキュラムの派生形であることを明らかにしたう

えで、人間と自然の相互作用としての環境のなかで「正義」を考えるグリーン・ソーシャルワークの視点から EE の目的論について論じ、さらに子どもたちによる表現活動を中心に据えた音楽教育における EE の展開事例を示す。この作業を通して、EE のカリキュラム類型、目的論、実践理論を、教育学、ソーシャルワーク、音楽の視点から描出し、幼児教育における EE 導入の意義とその価値について述べる。

## 2. EE のカリキュラム観

### (1) EE の源流—アメリカにおけるコア・カリキュラム

今日 EE と呼ばれている教育実践のような、コアに特定の教育内容を置き、その周辺をその他の様々な教科学習や子どもたちの活動等を配置する考え方は、古くは「コア・カリキュラム」(core curriculum) の名で知られる。このコア・カリキュラムは、別名「中心統合プログラム」(concentric programme) とも呼ばれ、18 世紀ドイツの教育思想家ヘルバルト (Johann Friedrich Herbart,1776-1841) 考案の教授法に源流をもつ。ヘルバルトは、ペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi,1746-1827) の教育実践の理論化を通して、学問 (科学) としての「教育学」の樹立者として知られるところであるが、彼は教育の目的論として実践倫理学、方法論として心理学を基礎に、複合的学際的領域として教育学を組み立てた。

コア・カリキュラムに関してアメリカでは 1930 年代に、学問的教科ではなく、その代わりに子どもの経験や問題を取り入れて、教育課程が組まれた。当初は初等教育から起こったカリキュラム思想であったが、中

等教育にも波及していく。1934年に全米教育協会(National Education Association)の中等学校長部門において、理科や歴史といった教科課程を再編し「生徒に本物の経験をさせるという基本的な区分」に基づく再整理の主張が上がった。その際に学校や教師の側から「教科内容の細目を決めることから始めるのではなく、生徒から始める」とされたのは、この「波及」のあらわれであった(ラヴィッジ, 2008)。

日本においては戦後の「社会科」における生活単元学習にコア・カリキュラムの考え方が導入されたことは周知されている。

## (2) 子ども中心主義とEE

さて、こうしたコア・カリキュラムには、教科の枠組を解体する広領域カリキュラムという性格は共有されつつ、「コア」にないを置くかについては、いくつかパターンがある。発案当初は、教科のなかでも、比較的他教科と関連づけしやすい地理をコアに据える案があがったりもしたが、新教育運動の流れのなかで、子どもの興味・関心・衝動を肯定的に捉える子ども観が教育界に浸透してくると、コアが「教科」から「子どもの経験」に置き換わっていった。

EEも、教科や背景となる学問分野の枠組は残しながらも、実際の「学び」では、子どもたちの「主体的な学び」であったり、他者との協働という意味合いで「対話的な学び」であったりと、いわゆる体験学習に含まれる活動主義的性格の強い学習である。植物と食が結びつくのも、子どもたちの実体験を通した学びのなかにおいてであり、それらは経験として再構成されていく、子どもたちの「成長」と同義である。こうし

た経験としての教育の好例は、過去にデューイの教育実験によっても示されているところである。

## (3) 子どもの経験でつなぐ接続カリキュラム

### ①学校と社会との接続

子どもの経験を教育のコアに据えた実験は、デューイ(John Dewey, 1859-1952)のシカゴ大学附属実験学校の取り組みに代表される。デューイは、「学校を、子どもがある教科を学ぶためにのみやってくる場所ではなく、学校を家庭や近隣の生活と密接な関係をもたすには、何をなすことができるか、そしてそれをいかになすことができるであろうか」(Dewey, 1900)という問題意識から出発し、実験学校において子どもを中心に据えたカリキュラム考案を試みた。こうした試みは彼の次の言葉で言い表されている。

旧教育は、重力の中心が子どもの外部にあるということを述べることで、要約することができるだろう。その中心は、教師、教科書、その他どこであろうともかまわないが、とにかく子ども自身の直接の本能と活動以外のところにあるのである。このような論拠に立つなら、子どもの生活については、あまり語られないのが実状である。子どもの学習することについては、多くのことが語られるかもしれないが、学校というのは、子どもが生活をする場ではないことになる。今日わたしたちの教育に到来しつつある変化は、重力の中心の移動にほかならない。それはコペルニクスによって天体の中心が、地球から太陽に移されたときのそれに匹敵するほどの変革であり、革命である。このたびは子どもが太陽となり、

その周囲を教育のさまざまな装置が回転することになる。子どもが中心となり、その周りに教育についての装置が組織されることになるのである(Dewey, 1900)。

デューイにとって、学校と学校外の生活は断絶したものではなく、それゆえに学校での学びは家庭を含めた社会生活と有機的な連続性をもたされるのが理想であった。彼によれば、「子どもは単に、家庭ですでに経験した事物を学校にもたらし、そしてそれらを学習するべきだということを意味するのではなく、むしろ、可能な限り、子どもが家庭と同じような態度や見方を学校でもたなければならないということを意味している」(Dewey, 1900)。

デューイの実験学校において、教育内容間の「相関」について、次のような原則を示唆していた。大原則となるのは、カリキュラムの統一が子どもの構成的活動(constructive activity)によることである。この活動のなかには、人間の最も基本的な活動として、衣・食・住にかかわる典型的な活動として、彼の学校では料理、裁縫、大工仕事を取り上げられていたが、これらの活動を通して、子どもたちは動物、植物、土壌、気候等についての知識とそれから発展して物理・化学・生物、その他、社会の構造にかかわる歴史や地理の知識、子どもたち同士の協同学習を通じての表現技術等を身に付けていた(Dewey, 1900)。

社会と学校生活との連続性は、この学校における「オキュペーション」(occupation)の時間の活動によって保たれていた。

## ②幼児教育と初等教育との接続

こうしたデューイの学校での「相関」は、学校の教科間の教育内容だけでなく、幼児

教育と初等教育とを関連づける取り組みでもあった。当時のシカゴ大学附属実験学校は、四歳から十三歳までの子どもたちによって構成されており、今日のわが国の学校制度上、幼児教育の一部、初等教育、前期中等教育の一部にまたがる学校になっていた。幼児教育段階は、いわゆる「幼稚園」(Kindergarten)ではなく、「サブ・プライマリー」(sub-primary)と呼ばれ、初等教育段階である「プライマリー」(primary)との連続性が強調されていた。

サブ・プライマリーでの学びは、「家庭のオキュペーション」(Household occupation)と呼ばれ、「家族のメンバーと彼らが毎日していること、そして、料理という名の下で、洗濯、アイロンかけ、パン焼き、クリーニング、掃除といった日常的な仕事」「いろいろな家やその外部(外部の建築、材料、装飾)と内部の配置と家具」および「光熱」が取り上げられ、これらを遊びやゲームを通して、子どもたちの経験から出発した学びが展開していく。この学びを受けつつ初等教育では「社会的オキュペーション」(Social occupation)へとつなげられ、より発展的な学習へと変貌していく(Mayhew & Edwards, 1965)。

EEにおいても、子どもの経験をコアに据えることに成功するならば、それぞれの発達段階に応じた学びがその時々で可能であり、さらに時系列的にみたときに、一人一人の子どもの成長とともに、自らの経験のなかでの学びの連続性も保証できるものと思われる。

## 3. ソーシャルワークとしての EE—グリーン・ソーシャルワークとの関連

社会科学は一般に、人間の相互作用、組織、地域および社会に関する科学であると見なされる。アレクシ・ド・トクヴィル (Alexis-Charles-Henri Clérel, comte de Tocqueville, 1805-1859) の言葉を借りれば、「連想の科学」(the science of association) である。一部の論者は、この種の科学モデルを通信システムに限定することさえある。研究対象としての「個人」はもとより、物理的な環境はなおさらそこでは捨象される (Borch, 2011)。ところで、人間と環境の相互作用に関する考察は、ウェーバー (Max Weber, 1864-1920)、デュルケム (Émile Durkheim, 1858-1917)、およびマルクス (Karl Marx, 1818-1883) の研究に溯ることができる (Foster, 1999)。「アントロポセン・エポック (人類が地球環境システムに直接的かつ有害な影響を与えている時代)」にさらに移行するにつれて、社会科学は、持続可能な生態系を維持するために人間のシステムをどのように変更できるかを理解するのに役立つ重要な役割を果たしている。ただし、生態系維持のための変更の時間が不足している。世界野生生物連盟の最新の報告によると、地球の野生生物の個体数は過去 50 年間で 70% 減少し、淡水に生息する個体群は 83% 減少した (Almond et al., 2020)。

国際ソーシャルワーク連盟 (International Federation of Social Workers) のまとめた『ソーシャルワークのグローバルな定義』(The Global Definition of Social Work)によると「環境の重要性は、ソーシャルワークの世界的定義に含まれている。……それは、持続可能な開発を目的とした、複数のシステムレベルと部門間および専門家間の協力を組み

込んだ、ミクロとマクロの格差を超越する全体論的な生物心理社会的、精神的な評価と介入に基づいている」(IFSW, 2014)と指摘されている。経済的および政治的不平等のために、脆弱な人々は、汚染、自然災害、気候変動、COVID-19 などの感染症の蔓延などの環境問題の重荷を負っている。

こうした指摘に関連して、近年「グリーン・ソーシャルワーク」(green social work) への関心が高まっている。グリーン・ソーシャルワークは「環境ソーシャルワーク」とも呼ばれ、環境における正義の問題への対処を試みている (Power et al., 2018; Dominelli, 2013, 2018)。専門的には、グリーン・ソーシャルワーカーは、防災、準備、緊急救援など、災害のさまざまな段階に参加している。彼らは、国際的な持続可能な開発を支援するために国際 NGO で働いている。彼らはまた、コミュニティの組織化、エンパワーメント、アドボカシー、およびコミュニティの環境悪化に対処するための抗議にも関与している。

EE プログラムを通じて、子どもたちは自分たちが自然の一部であり、自然の管理者であることを理解することが期待できる。クモやイノシシを恐れる代わりに、彼らはあらゆる形態の生命に共感し、あらゆる形態の生命がどのように相互依存しているかを学ぶことができる。幼少期の具体的な思考から、幼年期と思春期の抽象的な思考と倫理的発達へと移行するにつれて、環境正義、他の形態の生命の倫理的扱い、連動するフィードバックループの分析についても学び始める。こうして幼児教育としての EE は、社会および生態系システムの維持にかかわる、環境的および社会的に公正な社会

を追求するために必要なアドボカシー、コミュニティ開発およびコミュニティにおける行動スキルを学ぶことができる。

EE においてこのような学習が可能となるのは、EE が「エコロジカル・アプローチ」(ecological approach)、つまり問題を環境に位置づけて捉える思考方法をソーシャルワークと共有することによる。ソーシャルワークでは、例えば不登校児童生徒の問題を考えると、その子どもの内面に原因を求める医学モデルではなく、その子どもを取り巻く環境に焦点を当てて解決策について考究する。従来は人間の組織した社会にその射程は限定されていたが、グリーン・ソーシャルワークではさらにその射程を自然環境まで拡大した。EE は人と自然との相互作用に着目する点で問題解決のストラテジーをグリーン・ソーシャルワークと共有している。

#### 4. 食と音楽をつなぐ視点

本項では、音楽教育の立場から食と音楽をつなぐ可能性について検討を加える。

音楽教育の立場から、筆者の米国での経験や日本での実践的研究の積み重ねも踏まえて、EE の導入保育者養成への導入の可能性を示したい。筆者は実践の科学である音楽教育学を専攻しており、実践的研究を主たる研究方法の一つとしていることから、ここ数年で手掛けた実践的モデルの2事例示すこととする。軸となるのは、食や植を学びの中心に据え、そこに音楽を含む多様な活動を学際的につなぐことである。

第一の事例は、食とアートをつないだ事例である。関東圏で夏休みに4日間に亘り高校生を対象に開催されたアートキャンプ

では、趣旨を、音楽に限らず、さまざまなアートのジャンルを参加者が選んで一人一人が追求すると同時に、それらのアートで他者と関わり、協同することに設定した。前者は音楽の中でも歌唱や器楽等、さまざまであり、その他、食、造形表現や演劇、映像などであり、各自が選んだアートのジャンルを磨き、成果発表を行うものであった。後者は、その日まで題材設定はせずに、各アートを追求する参加者が意見を出し合って、各自で何ができるか、全体で何ができるかを協議し、数日のうちに各専門性を活かした関りで題材も全てが決められ、パフォーマンスもしてしまう即興性の高い試みとなった。本論と関連する世界の「食」をテーマに、食文化を紹介しつつダンスも演劇も含まれる、「ディナーショー」を創造し、実践した。これらは研究的な実践であったが、1回実現したきりで、コロナで中断してしまったのが残念である。本学のキャンパスの野外で、食と音楽をつなぐプロジェクトを創発したい。特に EE は食と文化の接点を重視しており、例えば野外で収穫祭や、ティーパーティーを協同して創造するなど、音楽をふんだんに取り入れた企画は、幼児・児童、学生、地域が連携できる格好の機会となるだろう。

第二の実践は、植と音楽の関わり合いである。低学年児童が学校で育てる植物と、高学年児童が感受、理解する、音楽の構成や音色などの要素をつなぎ、表現領域の音楽活動を創作する授業の実践的モデルが開発途上である。パッヘルベル作曲のカノンを題材に、起承転結のような、楽曲の構成と、例えば「あさがお」の成育課程をかけたあわせ、音楽を即興的に変化させて演奏す

る試みである。本年度は、さらに高校生を対象とした内容で、ロックやヒップホップ等、音楽を変奏させる知識技能面の育成も視野に入れ、実践的研究が進んでいる。類似して、こちらは総合大学の教養科目、及び保育者養成校で扱った実践だが、エリックカール作「うたがみえるきこえるよ」を題材に、即興的に音をつけ、絵本から着想を得て、音を音楽にする実践の試行である。語られてこそいないが、カール作品には、生命の誕生から、開花等が、言葉ではなく絵で表現されている点を、学生たちは洞察し、解釈し、音楽や身体表現で活動を創造した。同題材は、例えば植物やヒトの成育課程の観察を踏まえて、それを音楽にするなど、さまざまな実践が構築できるだろう。今後も実践研究者、時に参与観察者として、現場に根差した研究を進化、深化させたい。音楽教育の立場から、実践的研究の成果を還元し、さらに EE が、他分野専門家と協同しプロジェクトを遂行しえるプラットフォームになることを期待する。

##### 5. むすびにかえて—本稿のまとめと岡山県立大学における EE の展開

以上、本稿では、EE について教育学の立場から、子どもを中心とする活動主義としてコア・カリキュラム展開史に位置づけ、基盤となるカリキュラム類型を明らかにし、環境における正義を人間と自然の相互作用を前提とするマクロな視点でのソーシャルワークの問題として定位し、食と音楽、植物と音楽の結びつきによる音楽教育の実践紹介を行った。そこで示された EE の意義と可能性は、同教育が学習者の主体的活動を通じた協同学習の実現の素地になるとい

うことであり、この教育はひとり個人をこえて人間と自然を包摂する広義の「社会」の構築と絶え間ない変革の力を学習者の中に培うことができるということである。

こうしたことを踏まえ、岡山県立大学では、子ども学科を中心に、岡山県下の幼児・児童を対象に食と植物を通じたプロジェクト学習を実施するとともに、将来保育者となる在学学生を対象として EE の担い手の育成も行っていくことを企画している。それは「はじめに」で述べたように、複数の学問領域を横断する形で展開される。

注) 執筆は 1. 小畑 2. 山本 3. デスマレス 4. 安久津 5. 児玉が担当した。

##### 謝辞

プロジェクト実施に際し、ご協力いただいたエディブル・エデュケーション岡山研究会田辺綾子氏には、こころより御礼申し上げます。

##### 参考文献

- 1) Dewey, J. (1900) , *The School and Society*, Chicago: Illinois, University of Chicago Press
- 2) Mayhew, K. C. & Edwards, A. C. (1965) , *The Dewey School: The Laboratory School of the University of Chicago 1896-1903*, New York, Atherton Press.
- 3) Foster, J. B. (1999). Marx's theory of metabolic rift: Classical foundations for environmental sociology. *American Journal of sociology*, 105(2):366-405.
- 4) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局(2004) 食を通じた子どもの健全育成のあり方

- に関する検討会
- 5) Alice Waters,(2008).Edible schoolyard:A Universal Idea,Chronicle Books
  - 6) D.ラヴィッジ (末藤美津子・宮本健市郎・佐藤隆之訳) (2008)『学校改革構想の100年—20世紀アメリカ教育史』東信堂、P.278.
  - 7) Borch, C. (2011). *Niklas Luhmann*. Routledge.
  - 8) Dominelli, L. (2013). *Green Social Work*. John Wiley and Sons, Incorporated.
  - 9) International Federation of Social Workers. (2014) *The Global Definition of Social Work*.
  - 10) Dominelli, L. (Ed.). (2018). *The Routledge Handbook of Green Social Work*. Routledge.
  - 11) Powers, M. C., Willett, J., Mathias, J., & Hayward, A. (2018) Green social work for environmental justice: Implications for international social workers. In *The Routledge Handbook of Green Social Work* , 74-84, Routledge.

**Pilot Study on the introduction of edible education in early childhood education**

**Chiharu OBATA, Takashi YAMAMOTO, Taichi AKUTSU, Eric DESMARAIS, Taichi KODAMA**

**Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University**

**Abstract** : This paper describes the curriculum types, teleology, and practical theories of edible education originating in the United States from the perspectives of pedagogy, social work, and music. In it, this study showed that edible education originates from the core curriculum and that it is a derivative of the child-centered curriculum. In addition, it was clarified that it is an educational practice that emphasizes children's independent activities. Next, we discussed the teleology of edible education from the perspective of environmental justice in green social work. Furthermore, from the practical examples of music education, food, plants and music were connected, and from the development of edible education, the practical theory was clarified. Through the discussion above, we have shown the significance and value of edible education in early childhood education.

**Keywords** : Edible education, Food and plants, Child-centered Education, Green social work, Music education